

福 竜 丸 だ よ り

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

第五福竜丸が原点

パグウォッシュ・東京シンポを終えて

小 川 岩 雄

テレビや新聞で伝えられたように、「アジア・太平洋地域の平和と安全」をテーマとする第五十六回パグウォッシュ・シンポジウムが、去る九月十六日から十九日まで、東京・六本木の国際文化会館で開かれた。このシンポジウムには、わが国をはじめフィリピン、朝鮮民主主義人民共和国、ニュージーランド、オーストラリアなど、この地域の国々のほか、欧米、ソ連など、十二カ国から三十一人の科学者、国際政治学者などが参加し、この地域の緊張の緩和や軍縮達成の方法などについて膝を交えて突込んだ討論を行なった。

パグウォッシュ・シンポジウムとは、今から三十二年前、いわゆる「ラッセル・アインシュタイン宣言」の呼びかけに応えて始められた科学者の国際的な平和運動の一環である。ラッセル卿(英国の哲学者)とアインシュタイン博士(相対性理論を創始した物理学者)は一九五五年、当時の東西間のきびしい冷戦のもとで、ピキニの水爆のような巨大な破壊力をもつ核兵器が出現したことに強い衝撃を受け、万一核戦争になれば人類の破滅は避けられないと

の判断から、科学者の会議を呼びかけ、各国の指導者や国民に警告するよう訴えたのだった。

パグウォッシュとは、二年後に実現した第一回会議の開催地(カナダ東岸の漁村)の名である。この会議には日本からも湯川秀樹、朝永振一郎両博士のほか、筆者も核実験による「死の灰」(放射性降下物)のデータを携えて出席した。これは小さな会議ながら、核の危害の程度や科学者の社会的責任、軍縮の必要性などについて、東西の科学者が共通の認識に到達できた点でたいへんな成功であった。

その後この会議は毎年各国で順繰りに開かれ、その規模や影響力が次第に拡大し、種々の国際危機の克服や軍縮の推進に独自の役割を演じ続けている。とくに湯川博士ら日本のグループは早くから欧米で信奉者の多い「核抑止論」の矛盾と危険性を鋭く指摘してきた。この立場は当初はなかなか受け入れられなかったが、最近の米ソ和解の流れの中で次第に支持者がふえ、欧州ではついにINF(中距離核戦力)の全廃が実現、米ソはさらに戦略核兵器や化

学兵器の大幅削減を目指している。

しかしアジア・太平洋地域、とくに北太平洋では軍縮は全く進まないばかりか、SLCM(海上または海中発射巡航ミサイル)の艦艇配備が野放しで行われ、朝鮮半島では南北間の対決が続く、その近海では挑発的な軍事演習が繰返されるなど、今なお憂慮すべき状況にある。もっとも、比較的緊張の少ない南太平洋地域では、オーストラリア、ニュージーランド、パプアニューギニア、大小の国々が一九八五年にラトンガ条約を結んで非核地帯を作ったし、東南アジアではASEAN諸国が非核化を着々と進めている。こうした現状のもとで、シンポジウムがこの地域の平和と軍縮の条件や実現方法を真剣に模索したことは、きわめて時宜に叶った試みであったといえよう。

パグウォッシュ会議は、太平洋上で核実験により被災した第五福竜丸の事例に人類の危機を鋭く予感した科学者の手で始められ、いまその太平洋を真に平和の海とするために英知と力量を傾けようとしている。実際、第五福竜丸こそがラッセル・アインシュタイン宣言、従ってパグウォッシュ運動の原点であったといっても過言ではあるまい。

(立教大学名誉教授・協会理事)

協会第九〇回理事会開く

九月二十五日、学士会館で協会の第九〇回理事会が開かれ、①展示館の修理・拡充、②展示内容の充実、③賛助会員の勧誘、④福竜丸だよりの編集、等について審議しました。川崎理事から展示館の修理・拡充に関し、東京都南部公園

緑地事務所に要請した経緯とその後、の進行状況が報告され、都知事宛の要請書について討議、今後その実現にむけ一層努力することを決めました。また、来館者の急増と展示館の役割の増大に対応し、展示物の内容の改善について、担当の小川理事から提案され、改善の基本方針を決めるとともに十一月

の展示替の具体化を討議しました。福竜丸だよりの編集について、会議に先立ち開かれた編集委員会の報告が本多副会長からなされ、最近相次いで開催されるパグウォッシュ・東京シンポジウム、反核国際法律家会議世界大会、核戦争防止国際医師会議について寄稿を求めると決まりました。

助会員の勧誘についても、一段の努力をはかることにしました。次回理事会は十一月十三日の予定。

展示館前で9・23のつどい

九月二十三日、展示館前広場でいくつかの集いが持たれました。午前、東京原水協が主催した「核兵器緊急廃絶第五福竜丸のつどい」には、一二〇名が参加、江東区に住む被爆者杉田ハツヨさんが、被爆四五周年を前にしての被爆者の思いを切々と語り、被爆者援護法制定への国民的運動の発展を訴えました。協会の評議員でもある作家の山口勇子さんは、福竜丸保存の意義について話されました。午後は、平和と軍縮をめざす全国連絡会主催の「久保山さんを追悼する9・23平和のつどい」。百余名の青年が記念碑に献花し、中国新聞の掲載記者の太平洋の被ばく者についての話を聞きました。協会の本多副会長も参加し挨拶しました。また協会も協賛して第九回久保山忌句会が開かれ、新俳句人連盟のみなさん約三十人が参加、第五福竜丸を見つめ久保山さんへのび俳句をたくさん作りました。電胆の濃き息供え遺言碑 森洋さんの句に記念のメダルが送られました。

福島顧問の御逝去を悼む

三宅 泰雄



本会の顧問の一人であった福島要一さんが九月一日、お亡くなりになった(享年八十二歳)。福島さんは農学の専門家で、東大を卒業した後は、農林省の技師として勤めておられた。しかし、福島さんをより有名にしたのは、一九四九年に創立された日本学術会議の、ただ一期をのぞき、その会員として奉仕

されたことであつた。私も一九六九年からの十二年間、会員に選ばれていたので、福島さんとは色々な面で接触し、お世話にもなつた。福島さんは、日本学術会議の民主化のために総力を上げて貢献された。いつも物静かで、理性的な人であつた。福島さんは日本学術会議の中では、多くの委員会に属し、わが国の学術の発展につくされた。

その中でも大きい問題は、わが国への原子力技術の導入問題や、日本中の大学に危機をもたらしたいわゆる大学問題などもあつた。福島さんは、これらの難問題の解決に努力した。平和の問題は、いままでもなく、氏の重大関心事

の一つであり、本会の創立以来、有力な支持者の一人であつた。福島さんのご葬儀のさいは、私は参列できなかったが、そのとき配付された履歴書を読むと、氏は一度、北海道大学の予科に入り、それを卒えたのち、再び、第一高等学校に入學されたことを知り、これには驚いた。いかにも若いころの福島さんの真面目さが偲ばれた。その若いころの真面目さを買った福島さんを失つたことに、私はいまさらながら悲しみを覚えた。

氏の著書は、日本学術会議の歴史を詳述した「学者の森の四十年・日本学術会議とともに」(上下二巻)で、一九八八年に日本評論社から出版され、最後の遺著となつた。

(第五福竜丸平和協会会長)



「基地経済」の島、イバイの海岸で遊ぶ子供たち。その表情には何の屈託もないが……。

人口四万人余り、目ぼしい産業もない太平洋の小国、マーシャル。核大国の巨象・米政府に、その島々で暮らす人たちの「顔」はきつと見えていないのだろうか。この七月下旬、マーシャルにビキニの被曝(はく)者を訪ねた。この春からスタートしたシリーズ「世界のヒバクシャ」の取材で、三十五年前の水爆実験、ブラボーの死の灰を浴びたロンゲラップなどの島の人たちの「その後」がテーマ。被曝者たちは今なお、放射能に体をむしばまれ続けていた。それはもちろん非常に深刻な問題なのだが、

「核の鎖」

中国新聞東京支社 栃藪 啓・太

それとともに強く印象に残ったのは、核実験でいやというほど犠牲になった島々が今も「核の鎖」から逃れられない現実だった。足を運ばれた方はよくご存じと思うが、マーシャル諸島のほぼ中央部にクエゼリン環礁という、世界最大の環礁がある。その南端のクエゼリン本島には空港があり、コンチネンタルミクロネシア航空の定期便が発着する。B727機が機首を下げ離陸態勢に入ると、巨大なレーダードームや林立するパラボラアンテナが目飛び込んでくる。ここは基地の島。米本土の西海岸の基地から試射されるICBMを迎撃する、ABM発射実験や、近年ではSDIの開発の一端も担っているとみられる、米国の核戦略上重要な、太平洋の「拠点」なのだ。そこにはもともと、マーシャルの人たちが住んでいた。それが戦後、米国の基地化政策で島を追われた。人々は今、船で二十分ほどのイバイ島に住む。わずか幅二百

m、長さ一・六kmのその小島は年ごとに人口が増え、今や九千人。なぜ、こんな小島にそれだけの人が。答えは明白だ。イバイ島のクエゼリン旧島民には毎年、米国から九百万ドル(約十二億六千万円)とも言われる「借地料」が支払われる。うえ基地での雇用を通じて島に現金が落ちるからだ。時間給一・五ドルが相場の国で、基地の大工や清掃の仕事は三、四ドル以上だ。仕事が少ないマーシャルの人たちにとって、この収入がいかに大きいかわ。イバイ島に住むジョン・アンジャインさん(六七)はロンゲラップの被曝者だ。愛する息子を死の灰による白血病で奪われた。核戦争を想定したミサイル試射には当然、厳しい目を向ける。だがそのジョンさんにして「島民の生活を考えてアメリカには何も言えないんだ」と寂しげに言う。イバイ島の人口膨張はまさに、米国がばらまく金への依存の強さを物語る。それは、今後とも基地を維持し続けたい米国の思惑そのものでもあろう。

十日間の滞在中、戦前の日本統治時代を知る何人かから「日本時代はよかった」という意外な言葉を聞いた。「日本はヤシの実のコプラをよく買ってくれた」「職業訓練校を造ってくれ、教育に熱心だった」。当時、日本にとって南洋の資源は魅力で、それを増産するための「日本の事情」による政策にすぎなかったのだから、言葉の裏に「アメリカはマーシャルの産業振興や教育に力を借してくれない」との思いがあるように思えてならなかった。日本に帰る前日、アマタ・カプア大統領に十五分だけインタビューする機会があった。数年前、大統領が提案した、ロンゲラップ環礁への先進国の核廃棄物受け入れ計画について聞いた。さすがに、この計画に対する被曝者の反発は強いが、大統領はなお希望をつないでいた。「だって、ロンゲラップの北側は既に(放射能で)汚れているんですよ。それにマーシャルにはお金がないんだ」。マーシャルは国連信託統治領から一九八六年、米国との自由連合に移行した。ことしは自治政府発足からちょうど十年になる。だが、経済的に自立でき、核の鎖から解放される日はいつ来るのだろうか。

平和随想 (3)

三宅 泰雄



私の生れは岡山市で、父は六高(旧制)の教授をしていました。関東大震災の年(一九二三年)に静高が新設され、父はこの新しい高校に転動しました。私もその静高に入り、一九二八年に第三回生として卒業しました。

以前、私は静高卒業生名簿で、第二次世界大戦で、何人くらいのかを卒業生が戦争の犠牲になったかを調べて見たことがありました。その結果、驚いたことに、第一回卒から終戦時まで、一八〇人をこえる戦死者がいたことでした。おそらく戦争が原因でなくなった人数は、はるかにこれを上回っているに違いありません。一八〇人は、その間の卒業生数の約五割でしたから、実際の死亡率

はもっと大きかったことでしょう。これから推算しますと、当時はまだ数少なかった、大学、高専校卒の犠牲者は二万から三万にも達します。その多くは、社会の指導者となった貴重な人材でした。私は大学卒業後、新設の北大理学部化学科に就職することができましたが、ここでもまた、得がたい学徒を戦争で失いました。その一人は土居健一君です。彼は英文学者土居光知先生の令息でした。土居君は私が属していた分析化学講座の一員で、休みの日には私の家に遊びに来て、学問の話や、雑談を楽しんでいました。彼は心やさしく、将来を大いに嘱望された青年学徒でした。もう一人は生島正次君でした。彼は仏文学者生島遼一先生の令弟で、私の静高の後輩でもありました。彼は物理化学を専攻し、のちに有名となった堀内寿郎教授の触媒理論のあらましは、彼が考えたものでした。北大化学科の卒業生からも、多くの戦死者がいましたが、私が今でも、心が痛むのはこの二人のことです。

私は一九三五年に東京にかえり、諸先生のおかげで、中央気象台に移ることができ、気象・海洋化学の開拓に従事することになりました。このころから、戦争は益々拡大し、私の研究室からも四名の戦死者が出ました。その中でも、私の手足同然であった、湯村義明君の死は、私にとって大打撃でした。湯村君は鳥取高等農林を出て、同僚の兄君・湯村哲郎君の紹介で私の研究室に入りました。そのころ気象台等では、空中電気の観測をしていましたが、放射性集電器が、オーストリアから入手できなくなりました。私はラジオ・トリウム(原子番号八四番)を使うことを考え、湯村君にその仕事をまかせました。湯村君の努力でポロニウム集電器が完成し、各地の気象台、電気試験場、各大学等で、戦時中も空中電気の観測を続けることができました。次に出てきた問題は、デノンマークから供給されていた「標準海水(塩分の基準)」も入らなくなり、これも、その代用品を日本で作ることになりました。この仕事も湯村君が担当し、精密な測定の結果、日本製の標準海水ができあがり、無事に海洋観測を続ける

ことができました。そのうちに、湯村君は軍に召集され、すぐにニューギニア戦線に投入され、再び私のところに、帰ってきませんでした。もう一人、思い出されるのは、高田平八君です。彼は一九四三年ごろ、研究室に入りましたが、入室早々、履歴書の不備などで、私から叱言をいわれたそうです。彼は私の書架から、英文の専門書を次々に借りだし、一生懸命勉強していたようでした。

彼は翌年の春、教育召集で静岡連隊に入りました。いったん召集解除のとき、東京駅から、まっすぐ、私の家に、沢山のいちごや、きゅうりをもって来てくれました。私は出張中であえませんでした。彼は「誰よりも先に先生にお目にかかりたかった。兵舎では、親父より、先生の方から多くのお便りを頂きました」と言っていたそうです。その直後、高田君はフィリピン戦線に送られ、レイテ戦で戦死しました。

私は、今でも、この人たちがいてくれたら、どんなに、心強かつたらうと思うのです。